

○丸山 直記¹

¹都老人研

開発された老化モデルが我が国で最も多いことは日本の高齢社会化の必然的な結果である。これらマウスを主とした老化モデルの利用に際して幾つかの限界あるいは考慮すべき点があることが多くの研究者から指摘されている。1) ヒトの老化に外挿する際に種差にかかわらず関わらず許容できる **public mechanism** と種差、系統差を意識すべき **private mechanism** であることを認識しなければならない。2) 加齢変化が生理的か病理的であるかを考慮すべきである。ヒト高齢者は様々な疾患を有しており、避けることができない生理学的加齢要因と容易に区別することが困難であることに通ずる。3) 老化現象の顕在化に関わる機序が殆ど全ての動物種に共通する相同 (**homologous**) モデルと現象論的にはほぼ同一であるが基本的な機序が異なる相似 (**analogous**) モデルが存在する。老化モデルを利用した抗老化研究に際してはこの3項目を含めた種々の限界性を認識し、医薬品開発における前臨床試験に相当する関わり合い方が必要とされる。多面性と個体差が特徴とされる老化を解明し、克服するための手段としての老化モデルの開発は今後も増加すると思われる。